

4. 奥尻町の概況

(1) 奥尻町の自然、概要

・奥尻町は北海道南西部の渡島半島の西約18kmに位置し、日本海上に浮かぶ周囲84kmの離島となっている。



図 4-1 奥尻町の位置

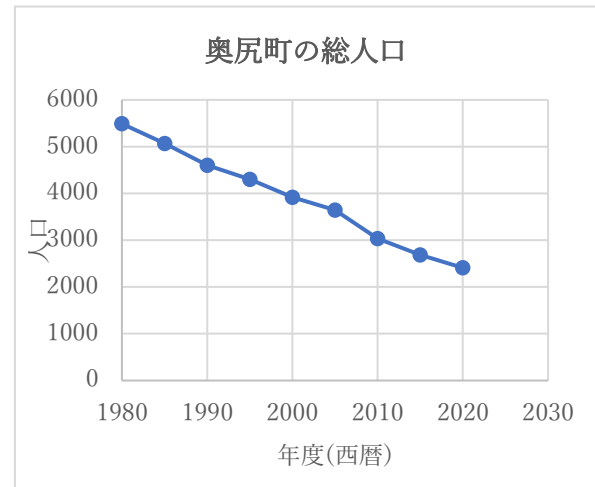
・同町の面積の８割を森林が占めており、豊かな自然を有している。そのため森林に保水され水が海へと流れ、栄養分を含んだ水が安定的に海洋に供給されている。水が豊富なこともあり、離島では珍しく稲作も行われている。

・町の人口については、1960年(昭和35年)をピークに過疎が進み急激に減少している。近年、町の人口は2千人台で推移しており、老年人口の割合が高まっている(表4-1)。

このような人口低下の中で、少しでも人口減少に歯止めをかけるため、当町としては産業の振興・維持に更に力を入れ、漁業者はイカ・ホッケといった主漁業、補完する養殖業、更には今回のブルーカーボンプレジットなどに取り組み漁家の安定を図る。また、新しい雇用の場や後継者の育成、とりわけ子供たちには島のことを十分学習できるよう応援できる体制の構築を図っている。

表4-1 奥尻町人口の推移

年度(西暦)	総人口	内35歳未満	内65歳以上
1980	5490	1369	551
1985	5069	1115	629
1990	4604	971	718
1995	4301	708	782
2000	3921	532	946
2005	3643	469	999
2010	3033	317	993
2015	2690	253	995
2020	2410	163	997



・2024 年、奥尻町役場新庁舎が完成し 5 月に開庁された。新しい庁舎は防災の拠点として町民の安心安全を支える庁舎として位置づけされている。



写真 4-1 奥尻町役場新庁舎開庁



写真 4-2 奥尻町役場新庁舎外観

(2)奥尻町の産業、観光

・水産業の町として栄えているが、近年の漁業ではホッケ・スルメイカといった回遊魚の不漁からナマコ・キタムラサキウニ・養殖業といった沿岸漁業が主な漁業となっている。養殖業では、以前はアワビ養殖が盛んに行われていたが、価格の安い海外からの輸入物が多く出回り規模が減少している。近年ではキタムラサキウニ・ナマコその他、トラウトサーモンや藻類養殖にも取り組んでいる。

・ワインの原料となる葡萄も島の畑で栽培されており、ワインを作る環境としては、海の囲まれていることで塩害もあり特殊な土地であるがゆえの苦労もあるが、時間をかけて潮風にあたり奥尻ワインならではのミネラル分が多く含まれたものとなっている。



写真 4-3 奥尻の葡萄



写真 4-4 奥尻ワイン

・観光業は奇岩「なべつる岩」(写真 4-5)を始め、多くの観光資源を求め令和 5 年度では観光客入込数が約 3 万人となっている。透明度の高い、きれいな海を活かした SUP やカヌーなどの体験アクティビティが盛んに行われている。



写真 4-5 なべつる岩

・奥尻町は 1993 年に未曾有だにしない災害「北海道南西沖地震」マグニチュード 7.8、最大深度 5（当時の震度階級）及びこの地震に伴い大津波（最大 29m）が発生し甚大な被害を受け、人的被害では死者・行方不明者合わせて約 200 名っており、被害総額では 664 億円となった。その後、高台への防災集団移転や島を取り囲むように防潮堤が整備された他に犠牲者の慰霊碑「時空翔」や北海道南西沖地震を後世に伝える資料館として奥尻島津波館(写真 4-6)が 2001 年に建設された。全国から多くの温かいご支援をいただき早期復興を果たし、現在に至っている。



写真 4-6 奥尻島津波館

・奥尻島は 1977 年に阪急ヘドラフト 1 位で指名された、「佐藤義則氏」や 2022 年にはドラフト 4 位でヤクルトスワローズから指名を受けた「坂本拓己氏」などプロ野球選手が排出されている。

(3)奥尻町でのブルーカーボン(海藻)活動、地域貢献活動、ゼロカーボン活動

・2017 年から高校存続のため、道立奥尻高校から町立奥尻高校へ移管され子供が少ないというところを補うため、島外の生徒を迎える島留学生制度を開始した。

普通科でありながら島特有の授業としてスクーバ授業があり、安全対策の面で漁協が協力し、2023 年には島留学生の一人が奥尻高校卒業後、島の漁師になりたいとの熱意から構成員の漁師は親方として手助けをしている。



写真 4-7 スクーバ授業



写真 4-8 奥尻高校生と漁師

添付ファイル 4

・2021年8月5日～6日に函館市の小学6年生6人を連れて「ホソメコンブ調査隊」を開催した。地元の小学生6人も奥尻町で合流し、2日間に亘ってホソメコンブ養殖の様子を見たり、ホソメコンブ料理体験や海藻の環境への役割とブルーカーボンの考え方などを学んだ。その体験をまとめた一人の小学生の夏休み体験記が北海道代表となり全国大会で発表するなどした。



写真 4-9 ホソメコンブ調査隊 1



写真 4-10 ホソメコンブ調査隊 2

・2021年、2022年に海藻活用研究会が原料提供などの支援を行い、函館市内の料理人の集まりである中国料理調理師協会・司厨士協会・海藻活用研究会共催の「郷土料理コンクール」においてホソメコンブをテーマにした創作料理のコンクールを行った。子供海藻大使賞も創設し、子供達に創作ホソメコンブ料理の審査をさせ、表彰状授与も行った。



写真 4-11 ホソメコンブを使った料理



写真 4-12 表彰式の様子

・奥尻町は2022年に脱炭素先行地域に選定され、2050年カーボンニュートラル実現に向けて再エネ・省エネに資する統合的な取組を行っている。

また、同年には地熱や木質バイオマスといった地域資源を活用した再生可能エネルギーの導入を推進し、低酸素の地域づくりの実現を目指し、奥尻町一丸となって取組を推進する

奥尻町ゼロカーボンシティ宣言をしている。

・奥尻町では、種苗、栄養源、養殖場など基準を満たすような養殖に取り組み、一部ワカメ養殖が藻類の生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した管理方法等について規格化した藻類有機 JAS 認定がされている(2022 年 5 月)。



写真 4-13 藻類有機 JAS 認証書

・2022 年ホソメコンブ化粧品「碧シリーズ」

奥尻産養殖ホソメ昆布を活用した商品として、北海道マリンイノベーション(株)から「碧シリーズ」として、化粧水・フェイシャルソープ・細切り昆布の3種類の商品が開発され販売開始された。

青年部のフェリーターミナル前ショップ「海館」や EC サイト、イオン北海道などで販売されている。



写真 4-14 ホソメコンブ商品

・2023 年クルーズ船(にっぽん丸)が3回にわたり寄港し、テンダーボートで計 932 名が下船。また、外国のクルーズ船(ハンセアテック・ネイチャー)が1回寄港しゾディアックボートで約 135 名が下船し、合計 1067 名に島の食・観光を堪能してもらった。併せてホソメコンブを使用した商品などを販売した。

2024 年ではクルーズ船(にっぽん丸)は1回の寄港で 229 名下船と減少したが外国のクルーズ船(ハンセアティックスピレーション、ハンセアティックスピリット)がそれぞれ1回の計2回寄港し、今回もゾディアックボートを利用しながら 249 名が下船し、合計 478 名にホソメコンブを使用した商品などを販売し、ブルーカーボンの取り組みの啓発も併せて行った。また、外国船の寄港時には地元の奥尻高校から語学協力をいただき、スムーズなエスコートや高校生にとっては語学の勉強の場となった。



写真 4-15 ホソメコンブなど販売



写真 4-16 下船の様子

・2023 年 10 月から「もっと知ろうおくしりのこと」を題材に海藻類について子供たちの総合学習の支援を行った。2023 年 10 月では種苗糸の種付けや 12 月には子供たちが体験したものを発表、同月で海藻の育成状況の把握、2024 年 5 月収穫や料理など海藻類について幅広く学べる場所を提供した。

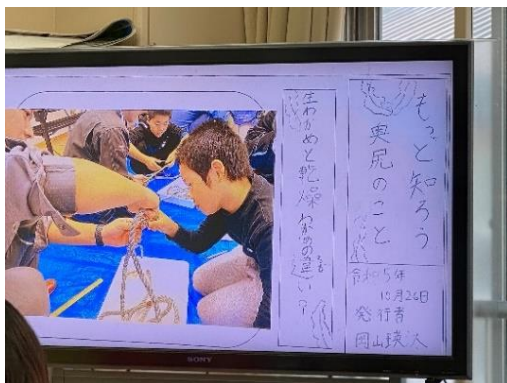


写真 4-17 もっと知ろうおくしり



写真 4-18 子供たちへの海藻教育

・2024 年 10 月には、構成員で地域や観光客へ電気自動車（グリスロ）の試乗及びブルーカーボンの啓発活動の取り組みを行った。



写真 4-19 電気自動車試乗とブルーカーボン